

## 《研究ノート》

# えびす信仰の現在に関する研究

—えびすを屋号にもつ企業・店舗へのアンケート調査から—

武庫川女子大学生活環境学科助手 大井 佐和乃

## 1. はじめに

えびすは、福をもたらす神、商売繁盛の神、漁業の神などとして多様なご利益を持つ民間信仰の神であり、全国の神社に祀られている。彫刻や図像などでは左の脇に鯛を抱え右手に釣竿をもつ姿でよく見られ、七福神の一員としても知られている。全国各地のえびすを祀る神社の中でも、その総本山とされる兵庫県西宮市の西宮神社や、大阪市の今宮戎神社などでは毎年1月9、10、11日の3日間にわたり十日戎がおこなわれる。この年中行事では毎年多くの参拝者が集まり、関西ではえべっさんの愛称でも知られる。

現代社会では何事にも合理的に考えようとする風潮がある反面、科学的とはいえないものにあやかろうという人々が多くいることも確かである。それはえびすのような民間信仰も同様に言えることだろう。福を招くことや商売繁盛を願うというのは、人が社会生活を送るうえで当たり前、自然にわきでてくる感情なのである。本稿は、現在におけるえびすの立ち位置、人々がどのような感情でえびすにあやかろうとしているのかを明らかにすることを目的として進めていく。

## 2. えびす信仰のかたち

### 2.1 えびすという語

「えびす」の語源についてだが、吉井良隆によると「えびす」という言葉は、奈良時代以前からの言葉であり当時の東北に住む人々を指す「蝦夷（えみし）」の発音がなまってできた。それが平安時代初期頃より「えみし→えみす→えびす」と次第に変化を遂げ、「えびす」が独立した言葉となった。そしてさまざまな漢字（夷・蛮・戎・辺）をあてるようになり、やがて蛮・異族のような観念から武士の代名詞となり、さらにはただけしく勇武なもの一般を指す語へと変化を遂げた。このような時代の中で神の名前として「えびす」が発生し、成立したとしている。現在でも地名などで夷・戎・胡といった荒々しい印象の漢字表記でのえびすが存在する。しかしえびす顔というニコニコとした表情をイメージする言葉と同様に、恵比寿・恵美須といった良い印象を与えるような漢字で表されている場合もある。えびすは表記として似つかない2つのイメージを持っているのである。

## 2.2 えびす信仰の変遷

喜田貞吉の「夷三郎考」(1935)によると、えびすが神の名前として単独に文献の中にあられたのは、平安時代末期、当時の国語辞書『伊呂波字類抄(いろはじるいしょう)』の中だとされている。これは、当時の広田神社の摂社として夷社が存在していたという記録であった。全国のえびすを祀る神社の主祭神名には、《大国主神》《事代主神》《ヒルコ神》が挙げられる。兵庫県西宮市の西宮神社では《ヒルコ神》を主祭神としている。ヒルコ神は「古事記」「日本書紀」の国生みの段に登場する神で、イザナギ・イザナミの神の子どもとして生まれたとある。西宮には昔ヒルコ神の像が海から西宮周辺の海岸に流れ着き、それを祀った場所が現在の西宮神社であるという伝承がある。このような伝説がいつごろ発生したのかは不明とされているのだが、このことからえびすが海からやってきた漂着神・渡来神という捉え方をされたことがわかる。それぞれの神社によって由緒があり、古くから信仰されてきた歴史を持つ。

米山俊直は「えびす信仰の三源泉：海神・市神・福神のルーツとその融合」(2001)でえびすには海、市、福の神としての3つの起源があり、変遷しつつ融合されてきた過程を述べている。元は海岸に住む人々にとっての豊漁をもたらす漂着神であり、港での交易の発達から市の神ともなった。その後西宮に住む傀儡師の集団が人形回しとともにお札の頒布を行い全国へえびす信仰を浸透させた。室町時代以降、大黒とともに民衆の信仰対象になり、その後商業が発達するにつれ商人からの信仰を強めていった。その結果今日まで十日戎やえびす講のような年間行事が全国各地で行われ続けているとまとめ、民衆からの自然発生的な信仰であることを述べている。漁村でのえびすを祀る事例や、えびすを神社で祀る際の《ヒルコ神》《事代主神》《大国主神》はいずれも海にまつわる神であることから、えびすは海に起源を持つ信仰であることがわかる。それが現在では西宮神社を中心とした十日戎が盛大に行われる地域においては、すっかり商売繁盛の印象が強くなっている。しかし鯛を持つおなじみの姿が海の神である面影を残している。

えびすには異人を意味する「夷」のような漢字が使われるが、日本の漁村では魚群を伴ってやってくる鯨や大魚をえびすと称し大魚をもたらされるとする信仰がある。波平恵美子の「水死体をエビスとして祀る信仰」(1978)では、水死体をエビスという名で祀り、豊漁をもたらす神として崇拝する民間信仰の中で、長崎県壱岐郡勝本浦での事例を挙げている。このように他界から訪れ、幸せをもたらす力を持つ漂着神として祀るえびす信仰がある。

## 2.3 えびす講

庶民の間で年中行事としてえびすを祀る習慣は全国で古くから存在し、それはえびす講と呼ばれる。漁業や商業の従事者が集団で祀るものと、個人が各家庭の中で祀るもの等地域によって傾向がみられる。東日本では各家庭でえびすに対して食べ物をお供えするといった行事として、商業漁業の神はもちろん、農業の神として祀ることも多い。一方、西日

本では漁業・商業の神を中心として祀られ、集団で行う場合が東日本より多くみられる。漁村では海の近くでえびすが祀られている。市街地では十日戎を中心とした盛大な祭りがおこなわれ、お店では大売出し・セールがなされる。日程は毎年10月20日と1月20日の年2回だったり、あるいは年に1回だったりする。十日戎として1月10日前後におこなうことも多い。

## 2.4 福神としてのえびす

さまざまな形で信仰の対象となってきた中でも七福神の一員としてよく知られている。喜田貞吉は「七福神の成立」(1935)のなかで、七福神は室町時代末期に京の町衆文化の中で成立し、それぞれの神は七福神の成立前からすでにあついで信仰を集めており、その中でもえびすと大黒はセットで祀られることも多く掛け軸などの絵にも描かれ、当時の上方で流行していたえびす・大黒を軸に、毘沙門天、弁才天、布袋、寿老人、福祿寿ら加わった結果今日の七福神が出来上がったとしている。七福神の「七」という数字については、喜田は仏教の文言である「七難即滅、七福即生」や、中国・魏の「竹林の七賢人」が大きく関係しているとしている。

## 3. 十日戎

えびすを祀る神社は全国にあるが、関西でおこなわれるえびすの祭りは1月9、10、11日の十日戎が中心となる。しかし神社によってえびすとして祀っている主祭神の名称は異なる。それぞれ、『古事記』『日本書紀』に登場する神をえびすに当てはめている。西宮神社、神戸の柳原戎神社、大阪の堀川戎神社などでは蛭子神として、今宮戎神社、野田戎神社、京都夷神社、尼崎えびす神社などでは事代主神として祀っている。神社によって由緒が異なるにもかかわらず、十日戎という行事は同じようにおこなわれている。吉井良隆は十日戎が庶民信仰の行事として広まった過程について「十日戎が庶民の信仰を集め、殷賑華麗な行事として世間に一躍有名となったのは室町末期から江戸時代にかけてであろう」。「近世にはいり太平の世になると、庶民の物見遊山、社寺参詣が流行をきわめ、にわかにな所案内記、図会等の地誌類が競って刊行されるようになった。摂津国をはじめ近隣の地誌は、その頃すでに有名になった十日戎を必ずとりあげ記載しているし、またそれが一層十日戎を有名なものにした」と述べており『摂津名所図会』『摂津志』などの地方誌にて記されていたことで人々に広まり、福神、そして商売神といった現代のような「えびす」「十日戎」のイメージとしての認識ができあがったとしている。さらに平山昇の「明治・大正期の西宮神社」(2010)によると、西宮神社の十日戎は汽車の開通(特に阪神電車の登場)によって都市部からの行楽として参詣する人々が増え、神社側も参詣人を呼び込むため自ら新聞広告を通じて都市部へ広報をするようになった結果、賑わいが増した。明治以降大都市を通る電鉄会社のレジャー開発の一部として、十日戎が現在のように大々的な行事と

なり、神社と電鉄会社との間の協調と駆け引きによって行事が維持されていた。今宮戎神社にて、HP ネットワーキングが 2002 年の十日戎参拝者におこなったアンケート調査（回答数 974）では、約半数の 49.2%が「商売繁盛」、23.9%が「家内安全」、16.7%が「健康祈願」、5.5%が「仕事・学業成就」を祈願しているという結果であった。十日戎の参拝者の多くは商業関係者の他、個人的な祈願を目的としている人々である。

著者は十日戎の期間中に神社から授与される福笹や、その他熊手などの縁起物に関する口頭発表を 2013 年の道具学会研究発表フォーラムにておこなった。

## 4. 屋号としてのえびす

### 4.1 えびすの名を持つ企業・店舗の調査

西宮神社周辺にはビルの名称としてえびすを取り入れたものや、店や企業の名称としてもえびすを使用しているものが多くみられる。そこで名称の中にえびすが含まれている企業や店舗の分布状況の調査をおこなった。例えば、えびす商会・居酒屋えびす・戎本舗のような企業名があてはまる。名称に取り入れるということは、えびすについて少なからず意識したうえで名づけたはずである。そのために日本ソフト販売株式会社から発売している「電子電話帳 2012 年版」（2011 年 4 月までに発行された全国の電話帳掲載データがすべて収録されている DVD ソフト）を使用した。これによって地域ごとのえびすが名称として使われる企業の分布状況が把握できる。

対象地域としては、十日戎など、大きなえびす講の祭りがおこなわれる地域のなかで代表的だと思われるえびす神社がある兵庫県（西宮神社）、大阪府（今宮戎神社）、京都府（恵美須神社）、広島県（荒胡子神社）、島根県（美保神社）、福岡県（恵比須神社）、東京都（恵比寿神社）、群馬県（桐生西宮神社）の 8 つの地域とした。検索名は、ひらがな 2 通り、カタカナ 1 通り、漢字 7 通り、アルファベット 4 通り、そして愛称としての「えべっさん」の計 15 通りとした。

- 方法：電子電話帳での企業検索 例：えびす商会、居酒屋えびす、戎本舗
- 使用ソフト：日本ソフト販売株式会社「電子電話帳 2012 年版」  
（2011 年 4 月までに発行された全国電話帳掲載データ収録 DVD ソフト）
- 検索キーワード：えびす、ゑびす、エビス、戎、蛭子、恵比寿、恵比須、恵美須、恵飛須、胡子、EBISU, Ebisu, ebisu, EVISU, えべっさん
- 対象地域：兵庫県、大阪府、京都府、広島県、島根県、福岡県、東京都、群馬県

調査結果は合計数が多い順に、東京、大阪、兵庫、福岡、広島、京都、群馬、島根となった（表 1）。東京が 419 件と一番多いのは、おそらく全体に比べて元々の企業数が多いからであり、えびす神社の影響が強いというわけではないだろう。【えびす】、【ゑびす】、【エビス】はどの地域でも多く使用されている。ひらがなやカタカナ表記は、漢字よりも一目

でわかりやすいと感じる人が多いため、元々企業やお店の名称として用いられやすいのだろう。

えびすには、戎、蛭子、恵比須、恵比寿など、様々な漢字があてられるが、今回の検索結果から企業や店舗名には地域によって使用漢字の特徴が出ていることがわかる。これはそれぞれの地域の地名や、えびす神社の漢字表記の違いによるものと思われる。

【戎】という漢字を使用するのは兵庫、大阪が大半を占めている。大阪の今宮戎神社がこの表記であることや、十日戎も漢字ではこのように書かれることから、【戎】という漢字が身近にあることがわかる。東京には、エビスビールの商標から駅名とされた山手線の恵比寿駅があるため、漢字の【恵比寿】による名称が多く使われている。【恵美須】が大阪で34件と他と比べて多くみられたのは、今宮戎が鎮座する大阪市浪速区恵美須町の存在からだろう。また大阪市営地下鉄には恵美須町という駅がある。【胡子】は広島が24件で、他の地域はすべて0件という結果になった。広島には厳島神社の境内神社として荒胡子神社がある。また、広島市内の繁華街である胡通りの目の前には胡神社があり、毎年11月第3金・土・日に胡子大祭という名でえびす講がおこなわれる。神社目の前のえびす通り商店街では同時にセールが開催される。また地名としても広島市、呉市、福島市などにそれぞれ胡町が存在する。もともと中国では北方、西方を意味するこの漢字が広島では「えびす」として浸透していることがわかる。

兵庫県の中でも、西宮神社が鎮座する西宮市内のみでの検索結果もここに記すと、【えびす】が12件、【ゑびす】が1件、【エビス】が20件、【戎】が22件、【EBISU】が1件の計56件となり、他の検索名ではそれぞれ0件であった。西宮神社元権宮司の吉井貞俊は『福の神 えびすさんものがたり』の中で、1963年と2003年の二度にわたり電話帳調べをおこなっている。それによると、1963年に【ゑびす】を書き表す店名は数軒あったのが、1軒だけになっているとある。また、2003年の電話帳調べの結果の企業・店舗名が列記されている。そこには【えびす】が8件、【ゑびす】が1件、【エビス】が8件、【戎】が12件とある。これと今回の検索結果とを比較すると、数は今回の2011年4月までに発行された電話帳のデータの方が増えている。しかし企業名をよくみると当時の企業が現在の電話帳には載っていないというものが数軒あった。

その土地ごとの地名などを見るとそれぞれえびすを表す身近な漢字が異なることがわかる。企業・店舗は、周囲に認知されることを重要視する。そのため自然と地域ごとに覚えてもらいやすい漢字を名称に選択している。また、「恵」、「寿」、「美」のような漢字が含まれると縁起が良いイメージになる。本調査に関しては2012年の日本生活学会研究発表大会にて口頭発表をおこなった。

表1 名称として「えびす」が含まれる企業・店舗調査数

検索名	兵庫	大阪	京都	広島	島根	福岡	東京	群馬
えびす	76	83	21	40	18	62	70	14
ゑびす	21	27	11	13	2	19	33	5
エビス	60	79	15	25	10	25	88	9
戎	52	106	2	2	1	1	8	0
蛭子	3	1	0	1	0	1	1	0
恵比寿	4	12	0	1	0	9	200	14
恵比須	3	3	3	5	2	17	5	0
恵美須	7	34	3	0	1	2	2	0
恵飛須	0	0	0	2	0	0	0	0
胡子	0	0	0	24	0	0	0	0
EBISU	2	7	0	0	0	0	7	0
Ebisu	0	1	0	0	0	0	3	0
ebisu	0	0	0	0	0	0	2	0
EVISU	0	1	1	0	0	0	0	1
えべっさん	0	6	0	0	0	0	0	0
計	228	360	56	113	34	136	419	43

#### 4.2 アンケート調査

調査結果からでてきた企業・店舗がえびすを名称につけた理由、意図やえびすに対してどのようなイメージをもっていて認識しているのか、またそのことによる効果などについてのアンケート調査をおこなった。今回はアンケートの対象として、代表的なえびす神社があると思われる兵庫県内と、大阪府内、広島県内、福岡県内の企業を選択した。

- 対象：名称に「えびす」がつく企業（兵庫県、大阪府、広島県、福岡県）

例：えびす商会、居酒屋えびす、戎本舗

- 実施時期：2012年4月～8月
- 質問内容：「えびす」を名称につけた理由・意図、「えびす」に対するイメージ、名づけたことによる効果など
- 配布：郵送、回収：返信用封筒による郵送（西宮市の一部は訪問）
- アンケート配布・回収数

兵庫県：配布88件、回収17件 大阪府：配布100件、回収25件

広島県：配布47件、回収11件 福岡県：配布43件、回収3件

回収計56件

業種としては小売、卸売業が多く 19 件、次に飲食業の 11 件、製造業が 5 件と続く。創業年は昭和 2 年の老舗から平成 21 年の新しい店まで幅広くあった。

名称にえびすをつけた理由やきっかけとして、近隣にえびす関連神社があるためとする回答が 12 件で最も多かった。なかには現在は違う立地にあるが創業場所がえびす神社の近くだったからという回答もあった。また立地の地名がえびすとつくためという回答が 8 件、縁起担ぎが 11 件、創業者の名字にえびすが含まれるためが 6 件、先代から受け継いだためというのが 5 件であった。

えびすと名付けたことによる良い効果で最も多かったのは、覚えてもらいやすいことの 15 件であった。近くにえびす神社があることで元々地元に通染み深い名前であることから覚えてもらいやすいといえる。逆に悪い効果はあったかという質問に対しては特になしという回答が大半であった。

またえびすに対するイメージは何かという質問に対しては、22 件が商売繁盛、商売の神様といった商いの神のイメージを持っていた。次いで幸福、七福神といった福の神のイメージであった。その他は、縁起がいい、笑顔・にこにこ、鯛と釣竿、大漁などがあった。

またえびすにまつわるサービスや商品はあるかという質問に対しては、飲食店はエビスビールを提供しているというものが 3 件あった。また看板、商品ラベル、商品を入れる袋、リーフレット、名刺、飲食店なら箸袋などの広告媒体に、オリジナルのえびすの顔または全身を描いている企業・店舗もあった。鯛を持たせているものが多かったが、各々の業務にまつわるものをえびすに持たせているものも見られた。またやはり、烏帽子をかぶり、ふくよかで且つ笑顔であることは共通の認識であった。

企業として十日戎に参拝をするかという質問では 38 件が参拝すると答え、その参拝神社はそれぞれ企業から一番近いえびす神社へ参拝するとあった。広島の場合の 11 件のうち、神社に参拝すると答えたのは 3 件のみで、ほとんどの企業が参拝する関西に比べて少なかった。また、十日戎に参拝する目的は大半が商売繁盛を願ってと答える中、特別に利益は望んでおらず、心の安らぎを求めているとする回答もあった。

今回のアンケートは企業に対しておこなったため、えびすに対して求めることはやはり商売繁盛である。商売繁盛のイメージが強いため、元々の海の神という側面での認識はほとんどみられなかった。しかし名づけた理由として、はじめから商売繁盛を求めてというよりも近くにえびす神社があるから、また地名がえびすである、自身の名字がえびすであるなど、地元あるいは自分自身との結びつきを意識していた。またえびすに対しては大半がポジティブなイメージを持っている。

## 5. あやかるといふ行為

2006 年に行われた「現代日本の呪術意識調査」というアンケート調査がある。東京都 23 区住人 1200 人を対象として、調査員による訪問留め置き法でおこなわれた。その結果とし

て東京に住む人々の約 60%が初詣に行く、約 40%が絵馬による祈願には効果がある、と答えている。多くの人にとってこのような行為はあまり意識せずに生活の中で自然におこなっているものと思われる。

2013 年に NHK 放送文化研究所が実施した「日本人の意識」調査（16 歳以上の国民を対象とし 1973 年から 5 年ごとに実施）では、「この 1、2 年の間に、身の安全や商売繁盛、入試合格などを、祈願しにいったことがある」「お守りやおふだなど、魔よけや縁起ものを自分の身のまわりにおいている」「この 1、2 年の間に、おみくじをひいたり、易や占いをしてもらったことがある」といった現世利益的な行動は 30%前後がおこなっていると回答している。約 40 年前である 1973 年の調査から比べておこなっている人が増加している。年代別にみると「この 1、2 年の間に、身の安全や商売繁盛、入試合格などを、祈願しにいったことがある」のは 10 代後半と 40 代前半が多い傾向にある。心に背負う心配事を無くしたいと考える人の他、軽い気持ちであっても縁起が良いと思うものにあやかりたいと感じ、商売繁盛や家内安全などの祈願や、お守りやお札などを持つ、おみくじをひく、占いをしてもらおうといったいわゆる現世利益的な行動をする人は現代に多い。このような行動は、宗教集団と固定的な関係を形成することなく行われる個人的な行為であり、それは人々のライフスタイルの変化に合わせて自らの形態を変化させた帰結（芳賀学 2016）といえる。また喜田貞吉は「福神沿革概説」（1935）において「時代によって、又社会によって、いわゆる『幸福』の内容にそれぞれ著しい相違があらねばならぬ。随ってその幸福を祈るべき対象たる福神にも、またそれぞれに沿革変遷があった次第である」と述べている。本稿は 2013 年の著者の修士論文を中心としたものである。えびすという神は「商売繁盛」「福の神」「縁起がいい」「笑顔」といった良いイメージが完全に定着しており、現代の人々から求められているものに合わせて存在し続けている姿が調査から浮かび上がっている。人々が相も変わらず現世利益を求め続けていることから、えびすは今後も世の中に存在し続けることを確信している。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 喜田貞吉 1935 「福神沿革概説」『福神の研究』日本学術普及会
- 2) 喜田貞吉 1935 「七福神の成立」『福神の研究』日本学術普及会
- 3) 喜田貞吉 1935 「夷三郎考」『福神の研究』日本学術普及会
- 4) 波平恵美子 1978 「水死体をエビスとして祀る信仰」『ケガレの構造』青土社
- 5) 吉井貞俊 1989 『えびす信仰とその風土』国書刊行会
- 6) 吉井良隆編 1999 『えびす信仰事典』戎光祥出版
- 7) 米山俊直 2001 「えびす信仰の三源泉：海神・市神・福神のルーツとその融合」『えびす信仰の謎をめぐって：えびす信仰研究会報告』えびす信仰研究会 131-143
- 8) 吉井貞俊 2003 『福の神えびすさんものがたり』戎光祥出版
- 9) HP ネットワーキング 2003 『大阪府の「十日えびす」』大阪府伝統文化総合支援研究



委員会

- 10) 竹内郁郎、宇都宮京子編著 2010『呪術意識と現代社会：東京都二十三区民調査の社会的分析』青弓社
- 11) 平山昇 2010「明治・大正期の西宮神社十日戎」『国立歴史民俗博物館研究報告 155』151-171
- 12) 大井佐和乃 2013「えびす信仰の現在」武庫川女子大学大学院生活環境学専攻修士論文
- 13) NHK 放送文化研究所編 2015『現代日本人の意識構造 [第八版]』NHK ブックス
- 14) 芳賀学 2016「成熟社会における宗教のゆくえ—宗教復興か世俗化か」『岩波講座現代 第6巻 宗教とところの新時代』岩波書店